

THE BOSUI JOURNAL

# 防木ジャーナル

ROOFING/SIDING/INSULATION/RENEWAL

9

2019

No.574



- ◆ NETIS登録技術の可能性
- ◆ 千差万別のマンション改修

# 通気金物接続不良をどう処理するか

鈴木 哲夫

建物の屋上には、防水層を貫通して排水管の通気金物が設置されていることが多い。今回取り上げた事例では、新築直後からパイプスペースに設置された通気管に沿って水滴が垂れ落ちるという事象が発生し（写真1）、未解決のまま10年が過ぎたという。果たして何に起因するものだろうか。

屋上の通気金物のバンドキャップを取り外して、内部を覗いたところ（写真2）、通気管と通気金物が接続する矢印部分に隙間が見える。加えて、通気管は斜めになったことで差込みができず、図1のようにA部パッキンより上のB部まで差し込まれていなかった。

パイプスペース内の通気管上部は、写真1の矢印部の周囲をバテのようなもので塞いであり、引き渡し時点で漏れがあったことをうかがわせる。通気管内の結露水が継続して流下し、接続部分の隙間から通気管の外側に水がにじみ出たのである。

このような状態の場合、通気金物の交換では防水層の部分修繕が必要になる上、配管をつなぎ直すのも容易ではない。何とか腕が入る状態であったため、現状を維持しながら手探りで指先の感触を頼りに処理する手立てはないか検討してみた。

処理にあたっては、錆落としや錆止め処理などに通常の工具を使えないため、手袋を使って下地処理をしてから、接続部をライニングする方法を思いついた。処理工程の概要は、図2に示すとおり。下地は浮き錆びが激しく、ケレンが必要であるが、ケレン精度を要求される溶剤形の錆止め塗料では困難であったため、3～4種ケレンで済む水性の錆転換型塗料を使うことにした。

隙間を覆うライニング処理部は、下地が凸凹で目視できない施工部位のため、手探りでもできるバテ状の湿気硬化型自在変形特殊シリコンテープを使用することにした。施工に際しては、下地の隙間や窪みに指先で押し詰めるようにしながら、しっかりとなじむように

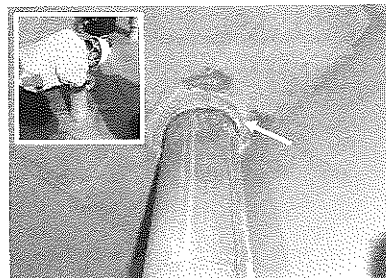


写真1 水が垂れ落ちるパイプスペース内の通気管（矢印はパテ詰め部）

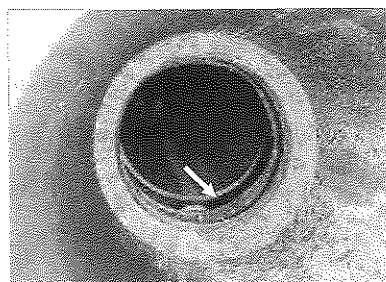


写真2 斜めに挿入された通気管と通気金物の接続部の隙間

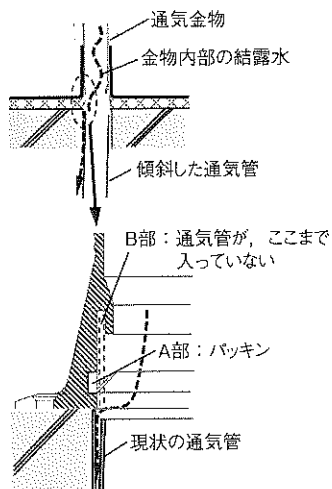


図1 通気管の接続状態

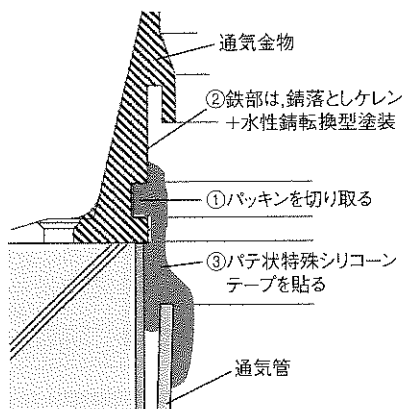


図2 通気管接続部の止水処理

ながら、しっかりとなじむように施すことで止水処理が可能となった。

通常の排水通気管接続部は、人の目に触れるタイミングが少ないため、不具合を発見することはまれである。機会があれば、バンドキャップを取り外して金物と配管の接続具合を調べるのが肝要である。

（南鈴木哲夫設計事務所

代表取締役）